

# 六

(能)

シテ 福岡 聡子  
ワキ 平木 豊男  
ワキツレ 北島 公之

大鼓 田中 一義  
小鼓 河原 清  
太鼓 飯森 友春  
笛 吉野 晴夫

間炭 哲男

後見 渡邊 荀之助  
松本 博

地謡 浅谷 之信 佐野 玄宜  
水口 純治 藪 俊彦  
酒井 章 高橋 憲正  
大澤 永靖 田屋 邦夫

休憩 二十分

# 狐

(狂言)

塚  
太郎冠者 鍋島 憲

主人 若生 敏郎  
次郎冠者 清水 宗治

後見 山田 讓二

# 敦

## 盛

(仕舞)

クセ 松田 若子

地謡 佐野 弘宜  
広島 克栄  
渡邊 茂人  
松本 博

# 天

## 鼓

シテ 島村 明宏  
ワキ 北島 公之

大鼓 飯嶋 六之佐  
小鼓 住駒 幸英

間 能村 祐丞  
笛 江野 泉

後見 佐野 由於  
佐野 弘宜

地謡 寺田 茂 藪 克徳  
笠間 啓 高橋 右任  
中村 清 渡邊 茂人  
山崎 健 川島 英治

## 能 六 浦 (むつら)

都辺から出た東国修行の僧たち(ワキ・ワキツレ)が鎌倉山を越え、相模の国六浦の里に着き、称名寺に立ち寄ります。山々は今を盛りの紅葉の錦というのに、この寺の木立勝れた楓の木は夏の青葉のまま、一葉として紅葉していません。不審に思う僧の前に里の女(前シテ)が現れ、いにしえ鎌倉の中納言(冷泉)為相の卿が訪れた折、この楓の木一本が山々の木に先立って紅葉したの見て、和歌を手向けて称えたことがありました。以来、そのことを面目として、楓の木は紅葉することをやめました。そう語る女はこの木の精を名乗り、終夜の説法を条件に再会を約して消えます(中入)。月澄み渡る夜更け方、称名念仏する僧の夢に、先刻の女(後シテ)が姿を現します。咲くべき季節を知る心ある草木として、楓の木の精は成仏を願いながら舞い遊びます。月光を浴び風に舞う紅葉は唐紅に散り敷き、秋の夜長もやがて明け方近く、かげろう姿で女はいとまを告げます。

## 狂言 狐 塚 (きつねづか)

狐塚と呼ばれる田へ鳥追いにやらされた太郎冠者は、鳴る子を使い、昼間は鳥追いに興じます。暗くなるにつれて心細くなり、狐に化されはせぬかと怯えるところへ、闇の向こうから声がして次郎冠者を名のります。狐の仕業と決めつけた太郎は次郎を鳴る子縄で縛り上げ、同じく慰勞に来た主人にもそうして、二人を青松葉でいぶします。鎌を借りに行く間に縄を解いた二人が太郎を倒し、それをなおも狐の仕業と思う太郎が追いつみ込みます。

## 能 天 鼓 (てんこ)

母の夢に天鼓が降り下り胎内に宿ると見えて男の子が生まれました。その後真の天鼓が降り下り、少年がこれを打てば妙なる声が出て聞く人々を歓喜させます。評判を聞いた漢の帝は鼓を内裏に召しましたが、少年は深く惜しんで逃走し捕らえられて呂水に沈められました。召し上げられた鼓は鳴らず、臣下(ワキ)が少年の父王伯(前シテ)を参内させて、鼓を打つよう勅命を伝えます。子に先立たれて心身共に衰弱した老父は鳴らない場合の死も覚悟して恐る恐る鼓を打つと、親子のしるしか心の耳を澄ませる声が出ました。感激した帝は王伯を家に帰し(中入)、管絃講で天鼓少年の霊を吊うことにします。やがて呂水の川面に少年の亡霊(後シテ)が現れ、吊いにより呵責の隙ない苦海から浮かび出たと感謝します。手向けの管絃に合わせ、亡霊も思う存分天鼓を打ち鳴らし、月に照らされた呂水のほとりに天上の舞楽が現出します。それも現か夢か、幻のように消えます。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年十一月四日(日)午後一時始

(能) 橋弁慶

(狂言) 棒縛り

(能) 當 麻